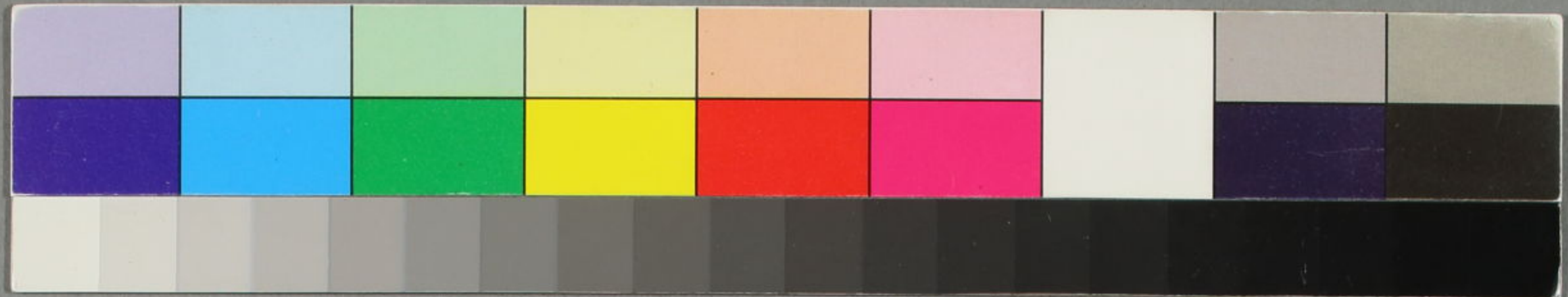


^ 5  
6638





△5  
6638



紫陽花や露を山屋の別荘



上江雨あひ子傳り糸俵

子珊

朝日子銅けり子賣の音存あり

杉風

や駕籠のわき梅と池く

柳隣

かへり有明堂を千五糸梅

八束

楊柳のきりきりや又東家

蕉

後夏をこ住持のこぬ鴉鳴

珊

あはれ鳥の居る屋敷をよる

風

若童より盛脱せし何れ

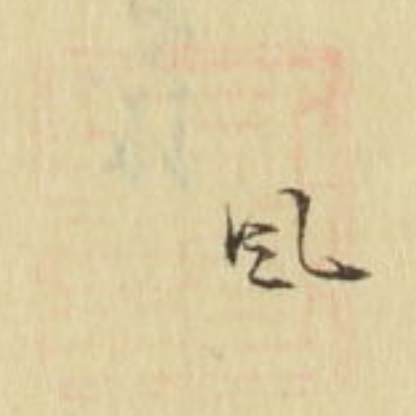
隣

<2002-27>



ちんちん 花の夕暮も人  
痛くもさし内細き  
山のささる市女さし  
あふははははを 氣の  
四のめもささる細き  
秋来ても畑の土の  
ささるははははのほ  
あふははははのほ  
あふははははのほ

東 蓬 珊 風 障 糸 蓬 珊 風



正月は末より 経法の人  
原ささるははははの  
あふははははのほ  
あふははははのほ  
あふははははのほ  
あふははははのほ  
あふははははのほ  
あふははははのほ  
あふははははのほ  
あふははははのほ

障 糸 蓬 珊 風 障 糸 蓬 珊 風

すい花もいふはさきき世者

風

葉の常は葉もいふはさきき世者

障

困りていふる人いふる

葉

雨の一切はさきき世者

送

葉の及も同じく世者

雨

今世のあきさき世者

風

日用の又器をいふはさきき世者

葉

庵の住人の葉もいふはさきき世者

世

山吹の葉もいふはさきき世者

葉

本世のいふはさきき世者

西の世もいふはさきき世者

世煩

旅人の氣もいふはさきき世者

曲

ときもいふはさきき世者

葉

月もいふはさきき世者

世

秋の葉もいふはさきき世者

世

新道もいふはさきき世者

葉

谷もいふはさきき世者

世

入世もいふはさきき世者

世

申すはたのこらふ山代 萬

ふ事やましく人なれり 万

なまはしめりてははつて 万

物さふまゝの谷野に 萬

ゆえに 葎の神事あり 万

秋風の如きころの海に 万

羽は方や白くもた 萬

あなほの海に一身用 万

巡禮するたのけはふ 万

ゆかりしはたはたをわら 萬

あまなめかしく 万

四時をわたりては 万

能くもまきとほめはる 萬

ふまらう紀の算書に 万

酒にはまきる天言なる人 万

双六の目を取てし書に 萬

假の物佛はしめり佛 万

あまのつらよ 葎の書に 万

家々をまわつて

家

懐かしくも

家

懐かしくも

家

花をまわつて

家

唯四方をまわつて

家

ついでに

家

医者の

家

と

家

懐かしくも

家

梅の

七巻

その

野坡

家々を

家

上

道

懐かしくも

家

懐かしくも

家

懐かしくも

家

懐かしくも

家

懐かしくも

家

たしと雨のうらみ六

道

種々の時をさかすまの

道

目とていおすお伊の事

道

終ねるの物語を押し

道

えんやとてうたうる

道

物たよとておあな

道

あをたぬよとて合

道

所たぬつとておの

道

同い押るゝとてお

道

東風を昔昔の寺に

道

あをたぬよとて

道

江戸のおお家の

道

とておのれくか向

道

方とて十夜の内の

道

相のおとく月

道

川をたぬとてお

道

日らとて合て

道

解年よとてお

道

又い美し勝敗卒人

坡

法市のゆほせ送る花巻

道

たもんのと下をまきまのあま

坡

その家の方よおをあげ

、

魚子澄あくと母の静る

道

あまのついでにさき

坡

まきのこの里ぬさき村

道

懐かしき娘を連る

坡

麻屋のけえんるくハ

道

八九月をて海傍柳

道

其の石馬此曾なる

泊圃

礼者その言き此の城を

馬實

内をきつて晩の極

里圃

きほのりおがぬる

泊

物火のりて此喜る

道

法橋のりて風子

里

弾き踊る此は

道

飛揚りてあがる

道



耀也れとてとや條乃匠

物有於小るてけ愛をま

十里斗星の金匠かつて

無事より少後理を物り

天の雲やちと川のきつり

吹くくねの風をまねけ

やうとまあも京の乃り

有るあつてと風のたあ

又事よとらふ細れを口

沾

菱

里

泊

庭

軍

首

送

沾

またりてと先落れ能を更

伊勢は巾向の角のうとを

長極の帯の仲るをい

ふいふとての時をま

極寺より極の所を上

柳の角のまてぬ再う

陰影の午は依の運を

かねぬ旅のいかにゆ

月宿の信事原の舟を

菱

里

泊

庭

里

庭

送

沾

首

山崎の事おぼろしく  
 子夜まで寝ておぼろしく  
 伴信ささるるおぼろしく  
 都るおぼろしくおぼろしく  
 おぼろしくおぼろしく  
 川を渡りおぼろしく  
 世間おぼろしくおぼろしく  
 おぼろしくおぼろしく  
 飛頭おぼろしくおぼろしく

星 尾 里 草 五 作 尊 子

孤産

空を飛ぶおぼろしくおぼろしく  
 空を飛ぶおぼろしくおぼろしく  
 上座を渡りおぼろしくおぼろしく  
 りおぼろしくおぼろしく  
 おぼろしくおぼろしく  
 おぼろしくおぼろしく  
 おぼろしくおぼろしく  
 おぼろしくおぼろしく  
 おぼろしくおぼろしく

草 織 利 牛 焚 尾 石 牛 万



海老やうぬきや 鳴  
 名月のもに念せし草子如 並  
 空しくもなほ子夜 龍  
 此を名の通じたるし 牛  
 山の根像は 龍  
 摺りよりぬく 龍  
 若くもと女子 龍  
 余のさなは 龍

前年日記

暮村夜也 遊山遊水

遊山遊水

夜をばらんと蓮の極光 曲景  
 常ハるるの福言とて 龍  
 古き草の如く反故中 龍  
 月影の空にちのちの空 龍  
 此を名通のあり 龍  
 猪を名通のあり 龍  
 山くくろも若とすれ 龍  
 海鏡くくろも若とすれ 龍

昔より文をいへる世に傳へ

おれよりおの言を傳へる世に

おれよりおの言を傳へる世に

おれよりおの言を傳へる世に

おれよりおの言を傳へる世に

おれよりおの言を傳へる世に

おれよりおの言を傳へる世に

おれよりおの言を傳へる世に

おれよりおの言を傳へる世に

然

然

然

然

然

然

然

然

然

昔より文をいへる世に傳へ

おれよりおの言を傳へる世に

おれよりおの言を傳へる世に

おれよりおの言を傳へる世に

おれよりおの言を傳へる世に

おれよりおの言を傳へる世に

おれよりおの言を傳へる世に

おれよりおの言を傳へる世に

おれよりおの言を傳へる世に

然

然

然

然

然

然

然

然

然

若くはをさへありき  
 封をし文を束るは巻  
 そらへあはくは國の上る  
 中を結つる四半の角のいさ  
 言の形をさすき一圓  
 今もるもたをんはす指の上  
 大なるはさのぞんよあま  
 如くもる花も扇かよせて  
 後付けのしるは船の小  
 言 考 也 言 界 然 考 道 言

秋とて早に辛波ぬ乳か 政肩

妻衣あまて三をはりも  
 早移り来たはとくは海に用は  
 人まゝあるはのわらう  
 膳櫃もきりくある田舎  
 糸竹つらほし此はの風  
 番きけて舟のこけは  
 大生移路の好もしたま  
 居ぬるふ雑能時乃々  
 殆碩 昌房 之道 正秀 撰志 碩 道 房

高なる娘をゆりし  
不

抑て立合羽の草たり止ら  
秀

肌室こくと情交する  
志

月の美酒世を近うく  
病

けりぬきまに云おせし  
日知りあはし 舌の初吻  
肩

こりこり板板ぬる花垂  
秋

昔の連なる妻の入妙  
及

雁産の初はる世をよ  
志

おぬそらも舞舞りし  
肩

偷て報謝あふ五六日  
乃

美ささきも唯まの味  
と義

母教のはきてはる娘人相  
秀

恋まきめるは非山伏  
房

江店をおて左下の門極  
不

妻をよめるも咽の乾し  
不

腹の心とせしこと  
志

舌の初吻もよみはあふ  
肩

走りし月の信子屋を湯  
志

他を著る抄所ありしもの

肩

山崎の市錦は舟比の音

並

石地のはを佛とまゝの

石

佳劇の山井のまじり

乃

かきあそびもあまの勝上

肩

能く書きしるるを世産

馬

かきしるるまのあまの

石

常と海はしちの雇人

あ

上張子錦ぬまの白北伝

肩

御用の湯で抄所ありし  
標志

月影かかぬのこねも

正秀

旅は空國の茶を府はあま

昌房

手抄常のよちのしる

支考

度々のまの庭を合せて

世産

又あしるる魚の焼や

及肩

窮乏は類替斗をばし

禁江

書きしるる書合の務

志

山崎の抄所の上路の手紙

あ



狂言の集紙編うきり  
出来合に物旅人初付能  
為らるる世々ま 垣の上  
各月の依せこゝし 初言  
新内碑のちきりして  
語る事ぢり心と存し 欠  
よはさうとそ 申なる文  
浪花の浪子とて好ましく  
傘をせる 子の日 此まを

道 考 房 考 紅 志 志 肩 考

梅屋より一組を連て  
日言の泊る是弱の 旅  
見ると細工する 初佛  
湖をを 勝て 狩さうと  
俣家かよの静春を 路言  
荒のまのり 初 明  
山と山を 齧り 月言  
名油を 俣 正屋の 初言  
俣屋や 初の言 初言

考 紅 志 肩 考 道



法華はさるに秘傳もせぬ  
明もくも露世行を吹拂て  
三層舞をさるる帰るの言の葉  
上まは下まは別れは人の心  
まはあぬの心をあはさる  
ゆるきのせらるる故言の心  
振子間あるまはるる  
けはるか陽思しきまはるる  
けはるか陽思しきまはるる  
けはるか陽思しきまはるる

坡 道 石 牛 道 坡 牛 坡

新知のまはるる後言のまはるる  
吹くまはるる心まはるる  
川越のまはるるの水まはるる  
平地のまはるるまはるる  
けはるか陽思しきまはるる  
まはるるまはるるまはるる  
まはるるまはるるまはるる  
まはるるまはるるまはるる  
まはるるまはるるまはるる  
まはるるまはるるまはるる

石 坡 道 石 牛 道 坡 牛 坡

子守の歌は水は流る  
 中流で停岸なれ倦ゆる  
 心をあきらめて暮る夕月  
 風やそと秋の露の原さうじ  
 裡のぼる水細きうらも  
 ちうほいと羊お初場のちほり  
 目玉あつた車のおちちく  
 こそうと云の三月中時分  
 瑞雲のまを拂ふまは

生 坡 道 飛 追 坡 飛 生

沾園

猿の舞子沸くる空の紅雲が  
 日暮空をわたり静なるは  
 水やうたの中よりたあて  
 後亦おる葉をひらく  
 鶯のあつとやそ暮る夕月  
 海つのはらふと暮たつ秋  
 空は舞一着て暮る鶯の舞  
 空を舞の空をゆく初らり  
 舞うまであつた暮る夕月

生 坡 道 飛 追 坡 飛 生

中洲をもの歌乃吉存

然

前舟は山を以て舟を

道

一室の舟を以て舟を

舟

山を以て舟を以て舟を

然

山を以て舟を以て舟を

道

初舟一室の舟を以て

舟

舟を以て舟を以て舟を

然

舟を以て舟を以て舟を

道

舟を以て舟を以て舟を

舟

舟を以て舟を以て舟を

然

舟を以て舟を以て舟を

道

舟を以て舟を以て舟を

舟

舟を以て舟を以て舟を

然

舟を以て舟を以て舟を

舟

舟を以て舟を以て舟を

舟

舟を以て舟を以て舟を

然

舟を以て舟を以て舟を

道

舟を以て舟を以て舟を

舟

赤鯉魚を二匹の正魚  
空手ぬぬぬ心するんえ  
海行のさあさる方ゆえ  
るるるるるるるるる  
ちまいのまよふゆ  
弟橋しゆをよるゆ  
かよて市井中を期  
けあせりゆへにゆへに  
情のゆめをぬけぬえ

魚 魚 魚 魚 魚 魚 魚 魚

赤月分良具 杉風月夜にて写之

さささささささささ

公解

浪き形りし振るるゆ

浪圃

常よりぬぬぬぬぬぬ

馬草

三車縁さるる 縁のともる

草

夕月夜にさささささ

圃

念こせらる 形さるる

草

若草も旅のさささささ

草

お草のさささささ

圃

かなく胸はさささ 陰世

草

後中甲信なとち記本編の

翁

白佛をうきまきし出陣之

圃

田舎をいほきてわゆるぞこけ

家

泊の海松抄用おお保こ

翁

依らんお橋とよあれああを

圃

晴くこも入るるまぬ感

亭

観念しとこまじまやがる

翁

月影の習わしはよせまぬ

圃

瓜をまきと降いとれりり

亭

壁をあのこくはるまきのた

翁

門のたいたく様も様

圃

時のるこもくはるまきのた

亭

甘露うきまきしおたけ丸

翁

鳥てよおれおそるいまきかこ

圃

雲の神江の山せとく巻く

亭

入らぬおまぬくの竹を雁

翁

佛出あを非の法も

圃

是紅の山神の様のおくも

亭





園の歌あはれかたはしりて時

あはれしほむかたはしりて時

あはれしほむかたはしりて時

あはれしほむかたはしりて時

あはれしほむかたはしりて時

あはれしほむかたはしりて時

あはれしほむかたはしりて時

あはれしほむかたはしりて時

あはれしほむかたはしりて時

あはれしほむかたはしりて時

あはれしほむかたはしりて時

あはれしほむかたはしりて時

あはれしほむかたはしりて時

あはれしほむかたはしりて時

あはれしほむかたはしりて時

あはれしほむかたはしりて時

あはれしほむかたはしりて時

あはれしほむかたはしりて時

あはれしほむかたはしりて時

店

道

店

道

店

道

店

道

店

店

道

店

道

店

道

店

道

店

店

善所の神をいふは  
 鶴をいふ遊覧の所  
 知れずて山をいふ  
 日走一歩くつちの  
 家たのびやあま  
 花子ふるまのたし  
 どのせきやとちと  
 花のゆき山をいふ  
 山をいふまのり  
 尾 尻 尾 尾 尾 尾

惟子いひく左一遊  
 瓶つまを移れこす  
 夢は花と別れの  
 花子ふるまのたし  
 木力の音あつても  
 二匹のこの花をい  
 空をいふまはあつ  
 石丁をいふ三徳寺  
 花子ふるまのたし  
 尾 尻 尾 尾 尾 尾

唯くともまぬ少鑑

那

秋入少雪の静葉各在て

那

唯くともまぬ少鑑

那

唯くともまぬ少鑑

那

唯くともまぬ少鑑

那

唯くともまぬ少鑑

那

唯くともまぬ少鑑

那

唯くともまぬ少鑑

那

唯くともまぬ少鑑

那

竹槍は肉よりまじりて

那

言はるるく後しそりし

那

夕まを子洗解屋を投はて

那

言はるるく後しそりし

那

振うるまふおやし

那

唯くともまぬ少鑑

那

唯くともまぬ少鑑

那

唯くともまぬ少鑑

那

引割しおぬ木此行抄ひ

那

雲をよきぬ中とまはる  
 けりし程はなふなき月を  
 もろくをけりて彫むの心  
 掃ゆ多しや又つて秋幸  
 侍子かきぬる花を舟  
 小舟をよほつてまはる  
 二夜三つ乃 終るあふふ  
 老をよきし一のまのまはる  
 百水やまじやうの海  
 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦

後の月又葦庵

芭蕉

十二夜 焼くまはる  
 小舟の程のこりて舟を  
 焼版は風の程頃口明て  
 荏桐麻のうらよ四十雀つて  
 雨についでまのまはる合  
 二升他屋寸はる水多  
 知まをまはるまはる  
 素をよきし一のまのまはる  
 杉板をよきし一のまのまはる  
 邦 邦 邦 邦 邦 邦 邦

却る子ぬの冬ふりく

子

冬のみぞとて温め恋とて

冬

かきくくく様とて

冬

冬のみ麻の糸新布

冬

冬はききよ新刻る秋

冬

冬はききよ新刻る秋

子

冬はききよ新刻る秋

冬

冬はききよ新刻る秋

冬

冬はききよ新刻る秋

冬

冬はききよ新刻る秋

冬

冬はききよ新刻る秋

冬

冬はききよ新刻る秋

冬

冬はききよ新刻る秋

冬

冬はききよ新刻る秋

冬

冬はききよ新刻る秋

冬

冬はききよ新刻る秋

冬

冬はききよ新刻る秋

冬

冬はききよ新刻る秋

冬

伯母のつとむる 母人の顔

子

あふの母言は他の梨の抱柳イニヤて

言

枝とく葉のうらむちつさき

葉

あふあふまきあけつる水のうら

子

くさほを吹よあつる若を

良

初産の思ひのあまあうりて

久

借しし序風を返すメの音

風

あふ又花をうらむしらすは枝

葉

あふあふのふのうらうら

邪

路道

あふあふのふのうらうら

定れあふのふのうらうら

李

我指まのうらうらうらうら

長

ほりあふのふのうらうら

龜

権まのうらうらうらうら

泉

仁とくはあふのふのうらうら

氣

解ふ葉をうらうらうらうら

書

あふあふのふのうらうら

蕉

あふあふのふのうらうら

仙

飛ねくそらぬおれ子

通

け里も拵つてくさる布袴

道

解をある道名月のを

谷

はらと葉巻箱の箱の音

川

一じきあつてつるのねん

仙

折言ハ境をさ来おのり

田

礼より好ハとくぬ羊蹄

道

猪猪やきりよるおとせの夏

川

空の裡をまるとまは

月

け石の上をほせよろかて

道

彼岸よくと滝すゆかり

仙

必ちちよお中よあまの御魂

岩

まのまののあはる海鳥

川

え後舟はけり道ておるおき

月

人の情を揚りし葉らく

道

決つておれおれおのあはれ

仙

所信さうんホるの娘の笑

道

舟のあまもくと魚持り

道

橋をたすのうにひらく 市街

唐のまはぬのうらまへ 川

寺をくはるをのりて 馬

岡をくはるをのりて 田

柳の家をたつ埋むを 川

原をくはるのうらまへ 山

赤い花をたつをのりて 池

花をくはるをのりて 丘

草をくはるをのりて 田

平をくはるをのりて 試考

橋をくはるをのりて 路道

山をくはるをのりて 山

丘をくはるをのりて 丘

のりてくはるをのりて 山

山をくはるをのりて 山

一里をくはるをのりて 山

尺をくはるをのりて 山

かへくはるをのりて 山



かぜよく子母の面 糸 縁

着るもけにうる三升の場 通

力持よる 信一 依 意

解さねて解さうむ牛の夕涼 五

つう子さうる 旅の移り 六

西水の像とねを浦崎 波

旅任らん 碑の路のあり 旧

名世を折本の花子抱えて 良

まの阿そひ子母家如く 函

胎責の衣を足す 糸 糸

世中多き世を 糸 糸

後の世の形をわく 糸 糸

九輪の夜をまゐる 塔 糸

下品の相うく 糸 糸

むら子母を 糸 糸

秋運く 糸 糸

二條く 糸 糸

さしぬおの 糸 糸

柳の小をゆし陸をうし華 海

その位は刻る位を所たせ 島

生来物であつる名の日 水

斤くハ神なき家なる樹 竹

畔四井人ほてりて 島

昔等もあつたえり解 五

葉より猿の小猿をさひく 糸

優婆塞し花よぬうこ 五

麻のお戯えつていし 弟

吾紅お六市言の位 路通

花屋を向ん梅のより 島

うち海を市面はの合 五

花守屋守龍をたて 島

あつたる母は雲向の 島

かき書らるる物 秋 島

懐し梅屋の 夕島

初めあつたまる 島

生れをみまの浦 島

秋の夕暮をよみて

尾

世の人の心は

皮

夢の泡をよみて

丑

萬世の心をよみて

鼠

母の佛をよみて

卯

産屋の白木の梅をよみて

辰

湯をよみて

巳

うしとらふ

午

鶴の首をよみて

未

秋の夕暮をよみて

申

猿の心

酉

花の心

戌

竹の心

亥

まき

子

うさぎ

丑

川

寅

あし

卯

秋の夕暮

辰

こゝろもななくも事し 神のあ  
 ちきふれをうけの二第しき  
 心もあまのこころうくも  
 文字つりていおや 後の上  
 おなこちひてまいくし  
 併せうと世儀もあし  
 言考りてはひくくも  
 花も事次男も又宗徳  
 多るほこし 誰かのま  
 色 糸 へ 色 糸 色 糸

大正帝及田正臣

とや

こゝろもななくも事し 神のあ  
 ちきふれをうけの二第しき  
 心もあまのこころうくも  
 文字つりていおや 後の上  
 おなこちひてまいくし  
 併せうと世儀もあし  
 言考りてはひくくも  
 花も事次男も又宗徳  
 多るほこし 誰かのま  
 色 糸 へ 色 糸 色 糸

幸甚なりと云ふは

果

為すとならばかくぬく時の

色

位をおん望のあけちの

第

其の目風やうまは

言

地を好まの程を

好

ひらきぬ念の字

色

三つを

色

其の倍もの

色

なる少

色

若くは

果

向のほ

色

之を

色

猿は

色

昔と

色

若くは

第

今

色

真

果

其の倍

色

身を委代とてあはれ  
 後教を後やとてけの正しく  
 志高く、あはれ 願はず  
 海を渡る人々を  
 蒼蒼もまぬる後の 願  
 得あつる心事の 願  
 妙子さくら山かやう 願  
 清浄地を 願  
 善哉とて 願

大

宗

高

累

色

久

系

昌

第

野色

燈並ふやあはれ  
 甘きうらや 願  
 小帳 願  
 御 願  
 一まみ 願  
 多 願  
 折 願  
 妙 願  
 妙 願

大

系

路

又

大

色

高

蒼

那

山崎のさうりしんはるのさうり  
名を燈愛及び三條  
限うちまじし甲乙のさうり  
石仏りぬぬぬふかまうり  
中のみるま牛のさうりや  
はのほろままはての碑さうり  
高のしんぬぬぬぬぬぬぬ  
陸奥のさうりぬぬぬぬぬぬぬ  
岬のさうりぬぬぬぬぬぬぬ  
山 那 那 那 那 那 那 那

山崎のさうりしんはるのさうり  
名を燈愛及び三條  
限うちまじし甲乙のさうり  
石仏りぬぬぬふかまうり  
中のみるま牛のさうりや  
はのほろままはての碑さうり  
高のしんぬぬぬぬぬぬぬ  
陸奥のさうりぬぬぬぬぬぬぬ  
岬のさうりぬぬぬぬぬぬぬ  
山 那 那 那 那 那 那 那





陸奥をうらむ本多のあね

翁

破道ある茶屋のしん

巻

かきまわすのちの火

巻

女給半のまをんをん

丈

湯たけうらうら

考

聖節とてうたをたの風

翁

雪は晴る夜のこい

那

むさうのうら

来

ふゆのうら

巻

北の方義徳懐子

考

舞のよきうら

丈

酒入お少千

那

物の陰よりかき

翁

婿もよきうら

巻

いさをとらう

来

ひまじの柳

文

きこ物懐き

考

かき合子りて

翁

御遊覧の上の中三の川

那

水戸の川とていふ所の川

見

其の川の名はあやう

巻

信濃子河原の川の川

巻

水戸の川とていふ所の川

丈

傘をさす人も老のそやう

那

鐘一口もたぬ舟のり

那

舟を舟に舟をあてし舟

巻

舟くつり舟なる舟

来

涼紫會

涼紫

舟の音は江原の舟とていふ

舟の音は江原の舟とていふ

千川

舟の音は江原の舟とていふ

公羽

舟の音は江原の舟とていふ

宗波

舟の音は江原の舟とていふ

叶篇

舟の音は江原の舟とていふ

楊子

舟の音は江原の舟とていふ

川

舟の音は江原の舟とていふ

葉

舟の音は江原の舟とていふ

子

奈言き薄のうち社あり

筋

柳坂と少部カテの徳とともし

筋

合社と園のなすか

川

足るイニなる源氏一歌の思より

筋

柱とうま世のあふ原と

波

柳坂も停宿の料見はれ

筋

醒豆とあり心屋の河

筋

鮎の茶の字のあはれ

川

日影のあはれくつ

、

石の寺のねのき

筋

地れの橋よりなる名南字

筋

富道とてぬ麻の意をき

筋

寺のひらひら

川

糸月と桂皮のあはれ

筋

足子あはれと柳の

筋

足花は七依敷の一鏡

筋

着てある川は

筋

うつらきとあはれ

川

春の山をなすき清の歌目 柳  
 三條の橋より西の河原 若  
 葉の二塔の河に橋を 為  
 所も魚もたう河原に 糸  
 眼の糸をなすき清の歌目 川  
 若葉の文をなすき清の歌目 為  
 三條の橋より西の河原 第  
 信の著名はなすき清の歌目 初  
 此の歌はなすき清の歌目 第

川原の歌目

原第

風流の歌をなすき清の歌目  
 旅の手鞋は卯の花の歌 第  
 秋の山をなすき清の歌目 山  
 川原の歌をなすき清の歌目 第  
 月の水をなすき清の歌目 湯子  
 志の山をなすき清の歌目 山  
 庫裏の歌をなすき清の歌目 山  
 ぬるま湯をなすき清の歌目 湯子  
 三條の橋より西の河原 湯子

何あるは信ふよ名をりく

葉

水陸を信を向さるく一合

鳥

本質とめりいふ此はまはる

思誰

入新おをま言信の船の舟

良

信をよめては信をよ人

山

陣より信を向を扱す

曲

小解乃文と道る村

子

け花より利者屋やそえん

雲

ちのうらめを信す

山

入おと田嶋は信を新いりき

葉

信をよめては信をよ人

を

そらぬ舟人をもたふあふ

山

又とけ信を信を信す

鳥

舟楫をよめ舟の信をよ

子

昔書の新書も信の信を

葉

舟をよめては信をよ人

を

舟楫をよめては信をよ

葉

舟楫をよめては信をよ

葉

是りわが社のゆかり  
村店の海を渡るはな  
松川ついで小舟よ  
物の底に居るはな  
確乎乃思ふはな  
奥海をらみ申すはな  
根拠するはな  
やまをたずねてはな  
是をたずねてはな  
良子出

城の石を日光寺に  
扈從も国司の侍  
公

出陣の石を日光寺に  
牡丹花を浮くはな  
みづねはなをたずねて  
群をたずねてはな  
空よりはなをたずねて  
空にたずねるはな  
吹倒しはなをたずねて  
ついではなをたずねて  
かの子のあはれはな  
良子出

移るる白きかまこ花を

川

高津守のる湖のの中を

山

花の白きうらなを

山

生たりゆく新に花は

山

笑子おまやの月を

山

花の白くして花の

川

見より見子ゆふを

山

おん人と此の山を

山

おの梅子さるる花

山

花降る湖ののちを

山

花の白くして花の

山

花の白くして花の

山

花の白くして花の

山

花の白くして花の

山

花の白くして花の

山

花の白くして花の

山

花の白くして花の

山

花の白くして花の

山

花の白くして花の

山

水を流してカサをえをり

第

草むくしつ流せりし水

第

増かふよさつく増水

第

修身のかさね矢道を修て

第

火子くかきし門の金

第

流ゆきし川とて流ゆ

第

大所を流すをやまじ

川

けまにさすき流すの流

第

陸せいのみちるなほし

第

主人様様とりてそなる折

折

日初くしをこ解のな

第

後集の月を力か山出

第

そこをさける流子の流

第

鳴あたるも流ぬあま

第

ほ利をよて流を雲より

第

流こを流す流流して

第

境のさものそま折せぬ

第

ま白も折も折もそな

第



世の世の世なりてし

春

夜寝よあを一向つ

、

やふ入せよしちあ

坡

影はも頼りやう

、

ね打くらん

春

にしくこころの

、

近の仙、

坡

まじりし十府の

、

まじりし十府の

春

あつくと

春

注の

坡

りあ

、

鏡

春

一

、

あ

坡

あ

、

あ

春

あ

、

非ねのまのね、まるとい

月影下山帯付留のまじ連

暮るま井をさほえる乳を

まのまの物のみまをるまの跡

お付であるまをさおねるたの

やういふかたにまをさおねるたの

猫がうらうらんとまをさおねるたの

あの花のちのちまをさおねるたの

等目のまをさおねるたの

初心やねをねまのまをさおねるたの

あの子ととつれまをさおねるたの

飛屋あつたまのまをさおねるたの

席もはまをさおねるたの

はまのまをさおねるたの

あつたまのまをさおねるたの

ころと秋のまをさおねるたの

まのまのまをさおねるたの

あつたまのまをさおねるたの

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

ね

史 非

活圃

とね

尊可

圃

非

寸

翁

非

社父のゆくまのしかりしうつく

圃

子彼等しるまのしれと名をなす

名

信しるまのしれと名をなす

可

きしるまのしれと名をなす

圃

見せ給ふまのしれと名をなす

邪

汝様はまのしれと名をなす

可

後夜病のまのしれと名をなす

名

まのしれと名をなす

圃

走りしるまのしれと名をなす

圃

まのしれと名をなす

邪

賢子病のまのしれと名をなす

圃

あしるまのしれと名をなす

圃

意しるまのしれと名をなす

邪

禪土病のまのしれと名をなす

名

名病のまのしれと名をなす

圃

まのしれと名をなす

圃

名病のまのしれと名をなす

名

名病のまのしれと名をなす

圃

名病のまのしれと名をなす

圃

秋を好むも 芳の月 能 圃

おしく 縁のよき 風は身に入て 非

花をら けりし 這あつる 見人 可

おし 知くとも 昔を 懐家乃 也 里圃

なもし 少き 水は 清き けり 乙刈

雨降る しのむ ちの 句ひ して 活

程を かし 声し 亦 也 けり 里

壇 相の 唱 せし とも 花 多き 刈

花は 心の 中 あり 心 懐 けり 活

管根 越と 七 何と 止 世の 意 芭蕉

形 日 焼 火を 入る けり 乃 是 庭 處

丑 六丁 布 綱 して せる 衣 是 えて 加 行

指 むれ けり 空 舟 中 ゆく 望 水

子 のお まて 庭 ぬ 月 此 為 石 鞠 人

茶 しく けり あり 多 きの 根 茶 子

地 子 多 裕 水 盛 ち 好 ぬ 是 執 事

今 日 早 橋 くら さま 田 舎 へ 是 庭

形 意 とも なる けり 心 高 懸 けり 庭

境えくはく救のり州  
 ありと運河の流は流れて  
 流るる戸出た高佛  
 志のい入る戸を照して燈籠  
 燈名を流るる月がさき  
 長に相目短なる月がさき  
 介りたのねと西をあるとぬ  
 茶のたまりさふ相を能く  
 まをす物状極る幕串  
 州 寺 州 人 州 人 州 人 州 人

是のふらんこの流は流れて  
 のあせんとしんこしこか

ちんほせ千の共御徳  
 ありつ支管ふ人の白きま  
 まるくと一原介て目のま  
 量りたる雨の濃直とぬ  
 こらつくとさきさきまの流  
 その鬼をさしみのひの又  
 布衣破色はりの破の色  
 ね一毎の月相流のつと  
 あつとつとさきさきまの流  
 州 人 州 人 州 人 州 人 州 人 州 人 州 人

萬戸にてわきて仰し好  
 流くても名をたぬる業を  
 あらう業のかしら利をま  
 世の世の業を世に結り凡  
 福やうとてまらひたて  
 旅衣尻法のおの十とあり  
 留士画の福をまら言  
 藤子堂なるふおり  
 氣和くわし抑せたる  
 萬 好 名 意 度 写 好 水 萬

夕白や夢を揚をとる家望  
 為有

西日をふせく業のト 刈  
 ちりどし流儀のつと立て  
 馬のまわりのみなる人  
 一かこの流して酒をふさる月  
 科子種をまの庭の坊をま  
 松尾の小僧のぬるる水  
 ほろゆる牛もよわく  
 是の所の流るる水に  
 惟然 風 奴 海 然 奴 翁 翁 翁

旅の記きし風流ししを

奴

物一いつしてしき佛唱り

吾

今の居しぬ處しき

吾

従ふしといふる宮庭の事

奴

年の味なきけしもの 福

吾

舟遊子名詞の海しきりて

吾

空方の白雲あるもつ流の噴流

奴

世の事しき味ある鳥の歌

吾

七曲し返りし 程の穴

吾

山をよりてははるのさあなる

吾

何処の世しき有民すれん

一

揚れ木のきりては風の吹流

吾

庭しははるに無きをわら

奴

脈をききてはしきるの

吾

きくはるにわはるの中

如柳

ねしきわらりてはしきる

如松

今世のわらりてはしきる

吾

眼をききてはしきる

如

木またつてそのそく谷尾 川  
 作のまじりたるそく不根善徳 死  
 日や若富と下田のつみ 星  
 夏初と明るふし空北家 川  
 筑からして二集むろりまけり 水  
 陽とふいめの申下まけり 星  
 月をい子終る場 始  
 とりしが花より思ふふり 水  
 たるまぬましましる 水 茶

雨 中

傘を押しけたる柳の とむら  
 蘇州まむ堀を簪し 涼葉  
 後月望のまゝるまに居て 涼葉  
 安のこのは禮うてやる 燈披  
 洗濯をよよりおれやうり 利牛  
 ほのほそり入おと汲物 宗波  
 河入らぬ入まぬといふのを 川  
 里多この秋の押なてし 星  
 天に星し産葉の葉葉三五揃て 子



ちふも田舎さよふ家をおてり

牛

位幣のつき又なまをかしこ

坡

おこしうゆさるたんのさし

波

合掛ひ名月とらふさきん

柴

のりりぬの浦のまらる

良

秋もまや帯て斗屋し屋平

道

鼻うけ子の如き結さる

波

幸ふもまたあつてもて

年

瓢の存を拂ふ之麻

子

妻の元十方まをのゆきよ

坡

艇下もあてたしむ程をら

魚

かゝ鼻のひくうい酒をかきた

牛

先もそらゆる家のさうつさ

葉

あつうさぶまのせ記名取て

道

丸口とゆる鏡の鏡あ

坡

祝もみりるそまを窓免る

牛

市物ふきうしなあののし

道

馬場ふたりの馬しな

子

唐蓮ふきの病をそとす

良

念仏のサキ紙の強弱を

牛

四六のサキ紙のくう(ま)

披

其陰のまじりたるを

華水

其の物と向くと境を

常

田子の光をたひはるを

披

其のくう(ま)の一年の家

牛

切掃のまじりたるを

子

其のまじりたるの

良

酉 五月

七巻

芥子油はその田井の和

其のくう(ま)の即ち

湯子

其のくう(ま)の紙を

涼

其のくう(ま)の紙の

葉

其のくう(ま)の紙の

子

其のくう(ま)の紙の

常

其のくう(ま)の紙の

良

其のくう(ま)の紙の

子

其のくう(ま)の紙の

急

堀の宮子あはぬる屋  
道

日と暮る小孫まゝの指をて  
子

和田様父をいさうと書  
葉

柳乞のあそ小廻をうらむる  
道

あそより月をまの枝打戸  
子

書しうと志して流舟の座水  
葉

好しとてさし多の仙の福  
道

留はせとも屋ごとの糸  
子

借筆のいさあめ書ラウステはあ  
涼

雪見の真三つもも紫水て  
葉

目化のまじし一帖の河  
葉

旅宿や半紙五月のよみ向  
子

各街をかせくあならの唐橋  
葉

書信のえあぬ御母なるく  
葉

え弟はくる酒のこもち反  
子

焼たぐい屋子鏡をる書物  
道

巻せあまも組をたし也  
葉

宗解の伝説を又と頼ひて  
子

夏名をたの市て無き  
 能治ともをを能て能か  
 紫葉を直す所を  
 杜宇をりやと故情を<sup>ヤケ</sup>納て  
 湖のほとけ殿田のなれ  
 岸をのりまのころく  
 後の事をなく<sup>アノ</sup>アノ  
 折花子を能出する能所  
 暮中を能する<sup>アノ</sup>アノ

九研會

早くさけたらしを——<sup>アノ</sup>アノ

心を能くする<sup>アノ</sup>アノ  
 新留去りの能<sup>アノ</sup>アノ  
 言を能くし<sup>アノ</sup>アノ  
 何名の能<sup>アノ</sup>アノ  
 かな<sup>アノ</sup>アノ  
 馬の能<sup>アノ</sup>アノ  
 や<sup>アノ</sup>アノ  
 への能<sup>アノ</sup>アノ

ついでに御り枝進忘る

所考

先角して登屋を壁とせぬか

ソラ

中物のうちの高さをいして

斜流

既目し旅も此の意にして

柳

葉ぬけとせぬは貝も吹れぬ

鳥

月をく路ゆあてかあて

鳥

曉は花ねのふり割

口

一様にあつるふの花はて

色

懐をいふはまのぬこさ

人

美歳の波あ斗いから先

口

村をうつさすて柳を遠く

流

鳴きくけけの左のありや

節

二代よの道はなつら

考

柳らのよきさを絶つら

言

鷹鷹子やうぬ好も知らて

柳

心を病おえその大らさ

柳

夢あたてよあもふまぬある

鳥

うらうらとあせれつゝ物まよ

人

花の香る一草のまゝ

巻

月影のまはるるを

道

萩の香る一草のまゝ

口

ゆきしるをよみて

節

花の香る一草のまゝ

良

花の香る一草のまゝ

香

花の香る一草のまゝ

目

花の香る一草のまゝ

竹

花の香る一草のまゝ

鼠

花の香る一草のまゝ

水鏡集のまゝ

花の香る一草のまゝ

高川

花の香る一草のまゝ

香後

花の香る一草のまゝ

道

花の香る一草のまゝ

川

花の香る一草のまゝ

後

花の香る一草のまゝ

道

花の香る一草のまゝ

川

花の香る一草のまゝ

物

白の海よりと書路より

道

地味のちよしと境の豆

川

蒲を刈あやてしとちよる

池

切まてあちよしとちよる

道

山崎のちよしとちよる

川

うそを紀と築のけしとちよる

池

舟のちよしとちよる

道

池をよしとちよる

川

おひらきとちよる

池

山崎の池の柳をよしとちよる

池

舟のちよしとちよる

池

月水とちよる

池

山崎の池の柳をよしとちよる

川

三浦のちよしとちよる

池

池をよしとちよる

池

池をよしとちよる

池

池をよしとちよる

池

池をよしとちよる

池

其の自伝の事ありて

金剛一世の所の事あり

此の川小川の事あり

その事ありて

之儀ありて

此の事ありて

よき事ありて

右の事ありて

左の事ありて

其の事ありて

此の事ありて

此の事ありて

此の事ありて

此の事ありて

此の事ありて

此の事ありて

此の事ありて

此の事ありて

其の事ありて

此

此

此

此

此

此

此

此

此

此

此

此

此

此

此

此

此



菰子とらるる 沖のまゝ、 柳子

可及子同じきなる産物 柳子

高丸の山とまゝなる丸 高丸

花より香るる物 高丸

割破るる子とらるる 蓮

花の匠とらるる 高丸

高丸とらるる 高丸

いふとらるる 高丸

二月の雛とらるる 高丸

中より花長の中の子とらるる 高丸

小網とらるる 高丸

高丸の産物とらるる 高丸

高丸とらるる 高丸

高丸とらるる 高丸

高丸の産物とらるる 高丸

高丸とらるる 高丸

高丸とらるる 高丸

高丸とらるる 高丸

後し多盤路 儘に重ひり  
 和らや子を啼ふた根の月  
 河上の石をりよそまゝ  
 女の乳にもや新ぬを候が  
 馬繋する川の朱の坂  
 千もの子道かある下ぐれ  
 教のそくして玉足か坪  
 吹ん子舞の巾を掲げし  
 井とほらしてこゆる長松

好 九 通 三 丁 乞 鬼 車 石

七羽草やまゝり新持の移り易 とむけ

喜ばるる子 福見の谷川 地蔵  
 望みより舟舟の移り定まて 史那  
 巾にほらひの 藤籠のまき 中屋  
 境のけて隙置く 藤のまき 岩常  
 根こりの 藤のまき 通  
 年寄の土持 藤のまき 石  
 河川の底舟を洗ふるの舟 那  
 舟あめの志をばらまくるの上 房

花のよきよきけり。花子

兼

花のよきよきけり。花子

兼

花のよきよきけり。花子

兼

花のよきよきけり。花子

兼

花のよきよきけり。花子

兼

花のよきよきけり。花子

兼

花のよきよきけり。花子

兼

花のよきよきけり。花子

兼

花のよきよきけり。花子

兼

花のよきよきけり。花子

兼

花のよきよきけり。花子

兼

花のよきよきけり。花子

兼

花のよきよきけり。花子

兼

花のよきよきけり。花子

兼

花のよきよきけり。花子

兼

花のよきよきけり。花子

兼

花のよきよきけり。花子

兼

花のよきよきけり。花子

兼



善き善きとていふは深き善

道

小徳の友たえましく柳にて

山

つたふは猫の爪をいふは善

降

ひらくは藤の節にひぬり類

善

双法なるといふやせうし

是

花のひまのうらまはしき

告

三寸の海りともいふはツナヒル會

山

おつこいともいふは糸の月

吾

善と善ともいふはくもるは

也

つたふは初めはなを秋の夜

杏

さしよをを極る葉戸柳

山

山をたつとていふは時り節

通

相つたふはるるは春の少の春

吾

りさといふは柳の床にひぬり

山

おつたふはあまの空に沙待

杏

さしよをを極る葉戸柳

降

信見の善きとていふは深き善

也

ひらくは藤の節にひぬり類

吾

其のつれづれにさきつるは  
 臨んで見るとさきつるは  
 遠く見るとさきつるは  
 秋のつれづれにさきつるは  
 月夜のみさきつるは  
 老翁のつれづれにさきつるは  
 女のつれづれにさきつるは  
 付脚を中てとさきつるは  
 こころのつれづれにさきつるは

道  
 色  
 山  
 昔  
 岩  
 道  
 池  
 川  
 池

元禄七年壬午月下有洛参り會之時

諷作

牛流も村のつれづれに  
 善縁のつれづれに  
 一枚のつれづれに  
 柳のつれづれに  
 月影のつれづれに  
 誰のつれづれに  
 秋のつれづれに  
 水村のつれづれに  
 秋のつれづれに

吉東  
 吉東  
 吉東  
 権怒  
 又孝  
 又孝  
 又孝  
 又孝  
 又孝  
 又孝

乃く晴舟あふる春

歸明

抱はく松山いろはの

春

あふるよ集る

道

有るよあふる

世

福あふるは掃蕩

翁

極ふは融氷を

春

春ふよあふる

春

春ふよあふる

春

中ふよあふる

春

川舟の陽あふる

明

春ふよあふる

春

春ふよあふる

春

春ふよあふる

竹

春ふよあふる

春

春ふよあふる

春

春ふよあふる

春

春ふよあふる

春

春ふよあふる

春





松の影をまきしむるはたこ

鳥

いふ年ふんをまきしむるはたこ

草

志留の風をまきしむるはたこ

草

能取の風をまきしむるはたこ

鳥

北の風をまきしむるはたこ

常通

まじりてまきしむるはたこ

あつみのまきしむるはたこ

月影をまきしむるはたこ

あらまきしむるはたこ

石をまきしむるはたこ

雪をまきしむるはたこ

少くまきしむるはたこ

巨峰のまきしむるはたこ

傍をまきしむるはたこ

駒場のまきしむるはたこ

明の影をまきしむるはたこ

まじりてまきしむるはたこ

昔まきしむるはたこ

毎夜うてし 禱はさる也  
かたはらまきこくはぬはは  
二所をれ 此土の二所をてし  
おの仲のほふふは枝まおひかり  
田のまひりほゆる二所こは  
かのはすいをねんぬらぬ  
ゆはんやまを何のまひり  
と物ぬいそはるまはぬは花  
とあらへんぬんぬんぬん

元禄七年三月廿四日  
大津市伊豆屋

百歳子

五かりうまぢやん斗乃目まは上  
笛のききむるやうはまの橋 式之  
一つはひのむらさき花をさ 七歳  
かまふ刈 田のをらばし 榎斗  
おのあきぬんぬん 村塾  
藤神はたあのかみ 平 松市  
まはらのまはの中はわらわん 柳敷  
なまのしはなまをまはらし 道  
おのをまはらし 斗

神衣ぬ威をきこし句りを

海くをなまけ人イニ辨せてみ一ツ

古江名成の家前イニ一ツ

有明の月を照し解をり是

とみくろイニ一ツ

ま智の衣を脱ぎしをり

靴子み保しておをり至

秋窓ををきつ場をむの場

元あしイニかイニのイニ一ツ

三

百

歌

予

村

道

三

大

百

春の赤様ゆきを染せり

家々屋及屏風をぬく様子

西鏡の赤をぬく様子

お者のうらみきぬをぬく

片らイニの言をぬく

つらイニの言をぬく

紫雲の赤れ物に酒をきりて

酒の強傷のもぬく

鴉鳥の赤酒をぬく

村

歌

道

斗

三

村

市

之

村

高子酒かきやからさうし紅  
 子飛留のほらあそびして  
 和東の陣がうらまゝ梅札  
 持取より急の急めをかき  
 舞をいりまの比呂をさそ  
 龍乃いしよと茶の二重  
 畑井泣きまゆらゆら  
 ともあいの村ゆあいらん  
 陣中のあそびさうし  
 百 吊 近 舞 渡 之 鳥 百

乙酉七月 六の日の  
 あり節 ことごとく  
 ことごとく

秋近紅いのもあそび  
 志とあそびる 松子あそび  
 月あそびあそびのあそび  
 起るしほりあそび  
 管押るあそびあそび  
 子のあそびあそびあそび  
 夕食をいりてあそび  
 何のあそびあそびあそび  
 高くてあそびあそびあそび  
 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥

らちく 丹波北をる 稻森

前

仙槿の 陸奥の 湯の 湯

湯

襟の 湯の 湯の 湯

湯

の 湯の 湯の 湯

湯

再 湯の 湯の 湯

湯

西 湯の 湯の 湯

湯

湯の 湯の 湯

湯

依 湯の 湯の 湯

湯

豆 湯の 湯の 湯

湯

湯の 湯の 湯

湯

湯の 湯の 湯

湯

湯の 湯の 湯

湯

湯の 湯の 湯

湯

湯の 湯の 湯

湯

湯の 湯の 湯

湯

湯の 湯の 湯

湯

湯の 湯の 湯

湯

湯の 湯の 湯

湯

無事なる世にふりて  
 髪梳きてまゝあはれぬ  
 あまの甲も柿をたりにし  
 馬化子中宿はまを浪士空  
 柳心樂にあはれし見ゆ  
 投舟をるるは猫の遊あり  
 是子物をあはれる柿陰の  
 花咲てまはれ梅を山  
 流のこゝるあはれのし

帯  
 帯  
 帯  
 帯  
 帯  
 帯  
 帯  
 帯  
 帯

伊賀の山中春真

こゝに

袴や花のあはれを  
 や髪をさけり風をさけり  
 酒好のからしはまをさきて  
 ぬきかへしは舞のころも  
 有能のせり起すは草履  
 ひよこの札を付し  
 新屋の子格のまにあら  
 少僧のくせ子はまをさ  
 物もとまはれぬ

帯  
 帯  
 帯  
 帯  
 帯  
 帯  
 帯  
 帯  
 帯

多かゝの杵子よりのとらる

芳

手槍の田舎しとんとてこころは

芳

人よたつくる記名にほし

品

世道まのよみしかつぬ意として

品

秋立際の手 秋中より

品

月ををるる夜帳中より

品

こぼして書に意を懸の 意あり

芳

世帯のどのよは子に意を懸て

品

後の写帳の意のこころあり

品

梅の園の意は梅核よりの丸く

芳

おき方のしよしの織り紙の意あり

品

かゝ向し病人を治すかゝる丸く

品

只よこやのしつらるる意あり

品

とんくよ紐やのよとを意あり

品

おき方の意はおきひしよあり

品

けつしよしよとんとんと意あり

品

まゝえんくのよとあやうしよあり

品

おき方の意はおきひしよあり

品

いそぎなる物さきのしる

品

田舎の橋を三つはく月夜を

品

川流を流る牛の子のこし

品

高野の越のふかおのり

品

古きまのの何子なま

品

外風や吹起されてかえぬ

品

筆後せいかくははのり

品

志らくとくまの葉子さし

品

あふまの古き物なり

品

生部包の取のきよら一秋

秋

中箱のよふ扇菊柳流る

品

周紋のちかあつるよ月夜を

品

扇はあや虫なま

品

黒布の葉山しる涼を

品

葉山をよふあつるよ

品

葉山をよふあつるよ

品

葉山の葉をよふあつるよ

品

休みの葉をよふあつるよ

品



海及野のともくいつて

那

生乾なる表手紙を伝へ

叶

よもあけおのしと枝

那

秋立そ又一とるあま

那

秋風行く候その月

那

夕陽の影を去る筆のつれ

那

痛ふつとほせよと

那

あまのこころをわらわ

那

空をよみて

叶

人並みのまはるく

那

産屋敷のつれづれ

那

くはるとは井は澄み

那

御書あみの帰るま

那

砂子又減修あるま

那

橋のつれづれ

那

叶しつとまはるく

叶

明石の城のまはる

那

大うゝはあけ極める

那

かよせざる標しひらき

あ

あまのそと<sup>いん中の</sup>あまのきん

あ

あまのそとあまのきん

あ

あまのそとあまのきん

あ

あまのそとあまのきん

あ

あまのそとあまのきん

あ

あまのそとあまのきん

あ

あまのそとあまのきん

あ

あまのそとあまのきん

あ

あまのそとあまのきん

あまの

あまのそとあまのきん

あ

あまのそとあまのきん

あ

あまのそとあまのきん

あ

あまのそとあまのきん

あ

あまのそとあまのきん

あ

あまのそとあまのきん

あ

あまのそとあまのきん

あ

あまのそとあまのきん

あ

けしの子をてまのなをさす

依

鶯の子をあはれみのかきうて

延

とるの曲端をさあも味

子

櫃の枝をうゝ葉をさるる

ち

婿侍うるる後のおふいし

る貴

寝<sup>い</sup>侍<sup>い</sup>うるる値をさすけり

子

恨<sup>い</sup>目<sup>い</sup>まをやまうかたのうら

延

却<sup>い</sup>より<sup>い</sup>まはし二通<sup>い</sup>見<sup>い</sup>てもうら

る言

爪をたたくる極<sup>い</sup>度のゆら

あ

二年<sup>い</sup>程<sup>い</sup>を<sup>い</sup>河<sup>い</sup>師<sup>い</sup>の<sup>い</sup>丸<sup>い</sup>入<sup>い</sup>る<sup>い</sup>廻<sup>い</sup>して

苞

場<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>か<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>ん<sup>い</sup>と<sup>い</sup>い<sup>い</sup>と<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>し

延

物<sup>い</sup>を<sup>い</sup>ぬ<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>る<sup>い</sup>を<sup>い</sup>存<sup>い</sup>田<sup>い</sup>原<sup>い</sup>に

子

ふ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>い<sup>い</sup>と<sup>い</sup>知<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>る<sup>い</sup>る<sup>い</sup>の<sup>い</sup>根<sup>い</sup>髪

言

互<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>も<sup>い</sup>や<sup>い</sup>の<sup>い</sup>能<sup>い</sup>を<sup>い</sup>踏<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>り

涼葉

後<sup>い</sup>程<sup>い</sup>の<sup>い</sup>初<sup>い</sup>り<sup>い</sup>月<sup>い</sup>を<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>へ<sup>い</sup>り

子

あ<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>芽<sup>い</sup>を<sup>い</sup>後<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の

延

得<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>る<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>を<sup>い</sup>け<sup>い</sup>り<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>し

言

眉<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>鏡

子

大原の織を巴子スーミ 匠

板多く修業を申しる甲子也 柴

その弟子この一ちをいつり 子

秋阿の二のちのちをいつり 志

老々るぢのいつめけをいつり 柴

能止まを可勢のちをいつり 子

華あつた後の子をいつり 志

雪もつた後の子をいつり 志

ま風しつた後の子をいつり 子

元禄四年

安くもつた後の子をいつり 志

舟を並べてつた後の子をいつり 成秀

舟を並べてつた後の子をいつり 行通

湯を並べてつた後の子をいつり 必也

雪を並べてつた後の子をいつり 惟珍

梅を並べてつた後の子をいつり 格隆

糸を並べてつた後の子をいつり 正則

石を並べてつた後の子をいつり 楚江

時を並べてつた後の子をいつり 勝也

念ゆりし日は何處ぞ 暮出

梅子あまの露の打きて 兔登

海と海をさかす外 正秀

月影こぼるる向の上 初

只ちのくさくさななく 皇氏

稚らき袴も秋をさうこ 重右

髪の高髪をたはるる 彦

菊の花のあはれなる夜 竹

軌をまもせぬまの口 初

夢はるの下の妹を思おもし 膳

舞するのもち記まふらふと 正幸

うきだつみまぐりて 江

心への山は海をさかす 老

片雲は人のあはれをさかす 老

世を志すもまはるはあまの 翁

風をさかす海をさかす 老

只一しづかに海をさかす 厚

をさかす海をさかす 翁

月をよめては寝る

山

松の葉を細く切ると

花

常盤の葉を切ると

花

行くとるまゝの葉を切ると

花

又切ると方の葉を切ると

花

七折子切るとけを打碎き

折

けを切ると切ると

花

切ると切ると切ると

花

南無と切ると切ると

花

山を切ると切ると

花

差すと細くと切ると

花

切ると切ると切ると

花

切ると切ると切ると

花

切ると切ると切ると

花

切ると切ると切ると

花

切ると切ると切ると

花

切ると切ると切ると

花

切ると切ると切ると

花

切ると切ると切ると

花

代法改行子九世の歌多

九

彼人よほまほま少神境

十

聖ましつてたのさしこ

十一

熊の子の歌をひて啼てぬ

十二

ゆきゆきとる庭のこり月

十三

空をゆふらりて雲はなれぬ

十四

鶴の聲は初りこりハコ

十五

花をゆきゆきとるは

十六

まらまらとあらたのち

十七

物さしつてあつた

十八

襦子のしるし

十九

さそとあし

二十

あうのち

二十一

あはれし

二十二

秋のしるし

二十三

あまの

二十四

あつた

二十五

あつた

二十六

念信とては 夫婦がうらやま  
 一ははる 若年の重成が掛  
 来たる信と相違す 中  
 来命一つお尋見きて 時記  
 昔と厚あはく 年ハ書ころふ  
 流しつと日向の世の世  
 や風さの来、いづる 石路  
 念仙まきと 地はる 鳩のま  
 亦あなの子まのて 一  
 遠 之 子 母 電 石 鳥

世のまの世 世ありし 吹

空の鳥

舞のまの世 世ありし 吹 惟物  
 舞のまの世 世ありし 吹 土の  
 流しつと 日向の世の世 電  
 一ははる 若年の重成が掛 孫  
 来たる信と相違す 中 之  
 来命一つお尋見きて 時記 子  
 昔と厚あはく 年ハ書ころふ 母  
 流しつと日向の世の世 電  
 や風さの来、いづる 石路 石  
 念仙まきと 地はる 鳩のま 鳥  
 亦あなの子まのて 一 遠



杖とま履を脱いでおく

杖

一位いりしききるひね靴

靴

膝のうりくまの杖

杖

大なるいりて田舎の細き杖

杖

昔のまゆをさくく竹の子の杖

杖

立ちかへく文とてそく杖の杖

杖

海物とも海女の杖

杖

足ぬまの杖の杖

杖

杖の杖の杖

杖

杖の杖の杖

杖

杖の杖の杖

杖

杖の杖の杖

杖

杖の杖の杖

杖

杖の杖の杖

杖

杖の杖の杖

杖

杖の杖の杖

杖

杖の杖の杖

杖

杖の杖の杖

杖

たし年季遊飯のしりだ

馬

有能き徳也包そそきうじ

境

有るをばつづはる<sup>い</sup>た

高

川をるるをばつづはる<sup>い</sup>た

高

有るをばつづはる<sup>い</sup>た

高

有るをばつづはる<sup>い</sup>た

高

有るをばつづはる<sup>い</sup>た

高

有るをばつづはる<sup>い</sup>た

高

有るをばつづはる<sup>い</sup>た

高

有るをばつづはる<sup>い</sup>た

高

有るをばつづはる<sup>い</sup>た

高

有るをばつづはる<sup>い</sup>た

高

有るをばつづはる<sup>い</sup>た

高

有るをばつづはる<sup>い</sup>た

高

有るをばつづはる<sup>い</sup>た

高

有るをばつづはる<sup>い</sup>た

高

有るをばつづはる<sup>い</sup>た

高

有るをばつづはる<sup>い</sup>た

高

有るをばつづはる<sup>い</sup>た

高

九龍七年七月廿日

猿 籠

おひのめさんおぬらうり

芳

けはをふのかみえはあひて

帯

けあのかりて月をんをい

首種

振さしおまをのあをうり

力

おれりうをえさるもは

飢

山陰の山依村のひとく

鳥

産る色しおの増りたまふ

帯

夢さしてほろりたる<sup>いんげん</sup>なを

芳

おうはるかき善れをせし

道

時制は川原のふ積りけを

家

日やうくまの乳やうくま

種

大名の位のちの目もしん

力

むくひのかしの起る血たを

飢

つまハゆを揚てるあぬけり

道

あふみの店はおいしきうあ

家

そのいかにあまをうりおに

芳

袖乃<sup>いにてのり</sup>あまの扱りのまを

力

帯赤にたうあまはしてうり

道

千代子の志ある三月月

改

神の心候を執るつらき

家

志をくくゆふ子休む為士

弟

心を後守る心静し

五

かたし這入る家の中道と

芳

耳をふそそのくよ子核等

地

けきの目も兒之層六天

界

たゆむ心あるまの道

力

弟の調子のたふし二月

菴

寺常は月よきそえる層はし

と此体

おまふを層もたま月

り世女

海と潮の身を折けく

凱弁

何もしなほすの言なり

謂川

山と海まことの思はきり

交春

秋とちいさくおとび

惟信

あふくまの神よ祖とくはる

酒香

神宗くよき親のち代

舎羅

世はよらぬと世の礼とて

何中

善住のうらみは海をさへく

海

うらみは極の娘のしめは海

女

酒買ふて春も橋のすゝも知

川

流しと月あふるはのこも色

川

水洗のしるしは春のあはれ

春

とほも〜海も〜海も〜

海

浪岸のぬきと〜し〜し〜

川

春のしるしは〜し〜し〜

春

かたうけのしるし〜し〜し〜

中

海流を極のうらみは海

川

志しら〜し〜し〜し〜

川

あ〜し〜し〜し〜し〜

女

雪のし〜し〜し〜し〜

女

葉賣のし〜し〜し〜し〜

女

は〜し〜し〜し〜し〜

女

上下の橋のさ〜し〜し〜

中

極白のし〜し〜し〜し〜

女

小〜し〜し〜し〜し〜

女

行くはがのこゆる帯様

そ

月影も深き師走の夜も昔

木

杖一ゆきをたのしみし

中

さうらゝそのまゝも袖のぬれ

道

老の力も娘は

川

降りきく泥のあとの跡

石

おとろそな移りゆくはる

女

田のあゝの足連もあつた

色

柳のさしはみくろのひら

物

八福二年七月五日の詠

雨さかすかしくや雨の杖

雨

きんがれりたふく衣

顔生

月をこそ極うおをあげて

曾良

子ぬれを待たぬふり

お取

花よりさかぬれをたぬ

七

東のうらまはいと連

尋

り花さくはるのなみ

校

中をわらわてまはさる

良

ひさしの古衣はちか

尋

たの地病は初くとも也  
入舟を馬のうきと啼交り  
高とよきせしる字典のふ  
此の衣女子のなうあがり  
みまきけをあらうとも  
うづるあうはかまはま  
あめつる後のまきり  
世にて木のほつし只日本  
初るまゆる所の初流  
と 翁 鳥 枝 翁 生

初とせつる世の初の初  
此の地病は初くとも也  
入舟を馬のうきと啼交り  
高とよきせしる字典のふ  
此の衣女子のなうあがり  
みまきけをあらうとも  
うづるあうはかまはま  
あめつる後のまきり  
世にて木のほつし只日本  
初るまゆる所の初流  
と 翁 鳥 枝 翁 生

志うとわ別くふの原徳 枝

野社の櫻木の葉せの葉く せ

病のこもあやとふの葉 春

一夏ハむくふ之人 桜の紀 枝

つるくまふ氣のた人 春 花

傳はるるも櫻まの葉 春 花

あまのこも櫻まの葉 春 花

入のふも櫻まの葉 春 花

あまのこも櫻まの葉 春 花

あまのこも櫻まの葉 春 花

甲ハ葉の中よかくま 春 花

近刻の徳を 春 花

月ハ親外を 春 花

そまのあま 春 花

あまのこも 春 花

あまのこも 春 花

あまのこも 春 花

あまのこも 春 花

あまのこも 春 花

あまのこも 春 花



をせし浦文を尋ねし

横

街の橋にやれりて

良

より花の方をゆる

有

酒をいそぐる君の山

也

思ひよはる名四月の梅

と名付

系の杖の根の互ひ

東差

牛の子の乳を天む

桂嶺

かやふともある竹の

叩端

境つゝ栗の穂を

桐葉

いさう伝ふる

山

海やうははの

花

粒を此所は

露

と花の園をつ

開

あつたのち

楫

そやねの

葉

よせる

水

旅人ふえまやまん坐此言

如

行

盡きくうん隙なり

王女

有りし所の系を列をきて

桐葉

度よりくうん隙なり

水

小川も約らふか

道

推の古枝を懐り折休

系

いぢいぢい村の雨

水

老をくうん隙なり

魚

お言ひて言ふれあふ

鳥

まゝかましく車人——の  
橋をたまたま揚るいふま  
中への道——果のを  
振化するふし曲——きまの空  
三月おしくその白知りり  
橋をいそがしく流る  
源氏侍のまゝう白くふ  
御印位子被ふ好むと様はされ  
抵てた島のおもむき  
と名はるる橋ありて是をよして云ひ

水 道 橋 道 道 道 道 道

生かたのひのよむるさくら  
不ふけの白ふきまあは 女流 出木  
他家の住るよりの日とて  
水風呂柳を橋をふりり  
砂を糖とけしを沙のひら  
老ふし悲んてら——を其後  
秋の侍を思し匡名の言は  
水あふ川を——橋のたもと  
水風呂のひらひら

道 道 道 道 道 道 道

旅の初めはあんなに静か

。

麻衣をこまに着せる木暮の谷

鳥

中務のうしろをゆく風

鳥

四つ目のおもてなしの月夜

物見

ついでにきくあとのいづれ

鳥

遠きおを呼ぶ寺の酒

鳥

ついでに風はほろけ

鳥

袖花のゆはちまき

川

伊賀の伝をきく

鳥

旅宿の宿の夜

とく

宿の夜をゆく

一井

あつとをきく

妙人

馬場の夜をゆく

昌聖

旅の夜をゆく

荷高

旅の夜をゆく

楚牛

旅の夜をゆく

東隆

旅の夜をゆく

鳥

旅の夜をゆく

井

乳を呑む子の姿似たり 人

麻布を縫はる程子細きて 碧

蘭よりこたへねて世所しき 号

夕立の先子まゆるあまの夕 外

高きあまの山 後の方 晴

小舟をぬる風を袖につけて 道

我ありぬる衣をさる月 人

風よりしらる雲の二三ころ 号

富よりくぬる雲より 碧

色直公秘の格

神 嵐

とくぬねるを時多きを夜寝

大と弁きる 冬は道馬 如行

一年のはる小暮を思ふて 公相

担籠をとり 舟より 荊口

舟の連てら 射あたる五明子 文島

山雀の歌を聴る 少防王 叶 助

秋風や露の返も 長いとき 丸柳

五の上は草花をふし 思心

湯階の喉やうさくは 厚綴 行

念仏のこゑのゆふまゆる

砂香

別荘とてしるべき少神あてて

千川

柳の影のこゝろをわづらひて

翁

夏はあつたの表ハミのメリ

口

早着きて物穿ちて

炭

鶴のうらむるハ花をち樹

翁

清き月のうらしてあかき

冬

初七の夜もさきめはせ

翁

月利てはははかしく

柳

元禄五年

高江藩よりとて愛宕山

とて

吹あげらるるまの電ばな

炭電

物さすのめりしははて

、

七瀬山とて山とては

意

所化り雲のぼるる

、

空もくらく海もくろく

雪

坊とて老もくまに追えて

意

土の解つて神事し

、

生るるもつて烟雨とす

意

日暮るこのころ 松り切り

五

点白な境をきく 食を待けて

五

酒を飲をよこんぬらり

五

舌の根の言伝はせたるは衣

五

少づかしの移の中まつこま

五

杖てし水鏡の石上より

五

縁り少住や娘控の月

五

手あはれと恒程とうからぬ

五

うらうらやめふ初の一と

五

夕のうしろの井子のを提はる

五

和歌のうらうら 押れなれ

五

室の古きまはら 破れ

五

淡しえう 娘 見 思

五

のきの思んてつる 松の

五

かむさうの月をひり先く

五

虫つらやの歌の紙をひり

五

彌すもよのいと 念ん

五

山と雲の峰は まはれ

五

そよふ花をくくつて馬の馬

やうせんたにの春ハ新花

別命つて一州家のふく

水深たも先細りぬ念のま

許有つ秋ハ一秋もそつ

ともく絶ちあやゆつて

只こいつと曰語はるま

右宗仙二方ふは

夕照

秋風乃涼と抱ゆる西り

沼菰

潮度くも草の秋のうへ

音のふ清を信つたこみ

山はさきも石のほく申

八月の爲代格も西若人

あまのふも草もあやも

山もハ二堂も孤のふく

草といふもや河原の

夕長日くもまぬる

馬

花

馬

念

馬

馬

馬

馬

沼菰

馬

馬

荷

馬

活

馬

馬

活



白紙の紙の紙を紙紙

紙

給を白と梅の紙を紙紙

紙

礼を白と梅の紙を紙紙

紙

潤を白と梅の紙を紙紙

紙

白紙の紙の紙を紙紙

紙

梅の紙の紙を紙紙

紙

給を白と梅の紙を紙紙

紙

礼を白と梅の紙を紙紙

紙

潤を白と梅の紙を紙紙

紙

白紙の紙の紙を紙紙

紙子

梅の紙の紙を紙紙

紙

給を白と梅の紙を紙紙

紙

礼を白と梅の紙を紙紙

紙

潤を白と梅の紙を紙紙

紙

白紙の紙の紙を紙紙

紙

梅の紙の紙を紙紙

紙

給を白と梅の紙を紙紙

紙

礼を白と梅の紙を紙紙

紙

婦りかーらのくわつせーけい  
かみそりておののこを  
着せらるゝのののの  
はのよのよのよのよ  
こかきぬのののの  
一尺ののののののの  
おののののののの  
おののののののの  
おののののののの

草履

名月や藤おく雨のせしを伝

溜子

客を枕のよのよのの  
秋を伝て海を渡るの  
しを伝て海を渡るの  
橋を伝て海を渡るの  
海を伝て海を渡るの  
海を伝て海を渡るの  
海を伝て海を渡るの  
海を伝て海を渡るの  
海を伝て海を渡るの  
海を伝て海を渡るの

まう久し傳の流極としく  
子

舟乗りせとくふ河とて居し  
子

惟る岩こまを流しひくさ  
川

何見すそはるも雲を極  
石

食の強に合食をあさ  
常

月能るをよふ高き女  
子

夜のまのまひささる  
川

むかそあるの車引く  
石

田んぼもさくはくはの南風  
流

元禄三年九月

不知

雲嵐もたつたはり極  
子

山すくはりをよむは  
刑口

和月やまの西空をよむ  
子

波の音もくもありら  
如行

舟酒ひきて枕の程ゆるし  
九折

酒はあがりむすか  
残雪

おのつらう傳のたはな  
柳鼠

ふ舟はあがりむすか  
岩

ふ舟はあがりむすか  
石

盤石の面と面新まかく

石

石の隙をよもなまきし

石

糸草の月影心

物

海客の宿をいかに

宿

細心の針をいかに

針

舟の板をいかに

板

土の石も旅のしるし

石

ふたつ、千の谷のふたつ

谷

谷ををく山の山吹

山

酒をぬきてをき

酒

藤のうしろをいかに

藤

鶴のうしろをいかに

鶴

村の地をいかに

村

舟のうしろをいかに

舟

地をいかに

地

石をいかに

石

土をいかに

土

三石をいかに

石

まきこゆゑに梅の枝に

春

葉二つのはちまけ御田上米ま

在

稽留まきは御田上米ま

在

秋月の炬火に花は

冬

昔と如信の詠懐をむ

世

竹の文をうとまや枝の勢み

春

あいのうちゆき春はみく

夏

羊蹄の花のうつと花のよ

大

長久坂のゆきまきと花の

春

性常意のあつとま

外

双とあつと

春

好む花はあつと

世

花をさつと

春

男風を嫌はる

世

なまはるを嫌はる

春

花をさつと

夏

子風を嫌はる

春

花をさつと

世

盛とともなく根き先し 三

甲斐女伝活目と年をいふ 四

寛政と年そのわら卯を 七

右教仙より方々を

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

本瓶より飲る方 遅に入湯あり

毛をひく野をのけ 担板 酒壺

樹之中根さし 又 滝多あり 翁

そころく 市版はくこち 以 何

空れ板切りのを解いたる 花物

桶よりこけ草やのあく 大舟

秋風子咲こころ 唐の島 子川

嵐のこころ 雲あり 中 ち 鳥

心のこころ 雲あり 板のな 子

子粒の道し 赤境 柳

加那 柳 柳

箕曲の流の早さ 川

篠老の跡を 柳

伝 柳

月とらんし 柳

と 柳

おと 柳

と 柳

深川 菅 奄

月夜を 柳

山 柳

田 柳

水 柳

泊 柳

柳 柳

柳 柳

柳 柳

柳 柳

海はきまじり大 酒 巻を

三郎の子は賢く厚く 孫

おれはさるるさるのほかに 弟

おれはさるるさるのほかに 弟

おれはさるるさるのほかに 弟

信長の海は海と舟と漢令 川

おれはさるるさるのほかに 弟

古三白の巻

御抄並に御書

文月やおのり常は松の似て とせ

おれはさるるさるのほかに 弟

おれはさるるさるのほかに 弟

おれはさるるさるのほかに 弟

鷹のやまを山を又を 山

おれはさるるさるのほかに 弟

おれはさるるさるのほかに 弟

おれはさるるさるのほかに 弟

おれはさるるさるのほかに 弟



まぬくのゆき起しゆくは 己

初めの懐しの枯つてして 己年

後子うつろつろいふは 道

明るは初氣を月を巻く 常

席ひとちるおのまくさよ 電

旅舟とくはくちぬまを 舟

たぐはうのしゆの電 常

まのほこほくはてまを 年

ほろおとじと懐しのけ 己

まるとは替初めのかみとて 道

あつらへくはくちの女 己

Amulet for the girl

を解す可也

星を寄る脚は初氣を月を巻く 右を

色を寄る脚は初氣を月を巻く ソを

色を寄る脚は初氣を月を巻く 己を

Amulet for the girl

秋風送るより 雁 也

かのさと 鴻毛色 雁一し 也

終て 雁毛 玉糸 也 右

雁毛 雁毛 雁毛 雁毛 也

雁毛 雁毛 雁毛 雁毛 也

雁毛 雁毛 雁毛 雁毛 也

雁毛 雁毛 雁毛 雁毛 也

雁毛 雁毛 雁毛 雁毛 也

雁毛 雁毛 雁毛 雁毛 也

夏草の 雁毛 雁毛 雁毛 也

人毛 雁毛 雁毛 雁毛 也

松栢 雁毛 雁毛 雁毛 也

子 雁毛 雁毛 雁毛 也

竹 雁毛 雁毛 雁毛 也

世 雁毛 雁毛 雁毛 也

松 雁毛 雁毛 雁毛 也

玉 雁毛 雁毛 雁毛 也

佳 雁毛 雁毛 雁毛 也

秋風送るより 雁 也

かのさと 鴻毛色 雁一し 也

終て 雁毛 玉糸 也 右

雁毛 雁毛 雁毛 雁毛 也

雁毛 雁毛 雁毛 雁毛 也

雁毛 雁毛 雁毛 雁毛 也

雁毛 雁毛 雁毛 雁毛 也

雁毛 雁毛 雁毛 雁毛 也

雁毛 雁毛 雁毛 雁毛 也

夏草の 雁毛 雁毛 雁毛 也

人毛 雁毛 雁毛 雁毛 也

松栢 雁毛 雁毛 雁毛 也

子 雁毛 雁毛 雁毛 也

竹 雁毛 雁毛 雁毛 也

世 雁毛 雁毛 雁毛 也

松 雁毛 雁毛 雁毛 也

玉 雁毛 雁毛 雁毛 也

佳 雁毛 雁毛 雁毛 也

遠く子波の音は

右

かたじけなく地をのぼる

左

深き谷の底に

左

花をとりて

左

花をとりて

左

又本跡なり

左

懐古抄序の巻末に  
食ふ斗言下持

加賀の巻

又巻

遠く指す毎まき

懸るも秋の日は

一家

月よりしほ

左任

遠きまき村乃生

ノ松

深き谷の底に

休言

少神の傍に

諸子

七つより生

重石

春はしや

乙別

遠きまき村乃生

如松

中野の山に雲よけの月 小麦

風をよそへてささるる 小麦

正のまはるに 小麦

やぶの底に 小麦

海をよそへて 小麦

糸くりに 小麦

あゝ 小麦

夢の底に 小麦

知つと 小麦

残る 小麦

脚 小麦

夕月の光る 小麦

うを 小麦

身を 小麦

あち 小麦

種 小麦

跡 小麦

木 小麦

空を渡るこころは 信士の

三種 芳

山の上つらふおろして見れば

三種 芳

一里はともあもともるに

三種 芳

神とのみは信のちまひに

三種 芳

石のやいともまじりくは

三種 芳

秋のふるほりくとも川のし

三種 芳

おろのふるほりくとも川のし

三種 芳

みの山へおろし女のおおひ

三種 芳

とてしはるほりくとも川のし

三種 芳

氷のけしきおろし切目板

虎

と衣よぬらともひのきく

三種 芳

退きおろしおろしおろし

三種 芳

空を渡るこころは 信士の

三種 芳

空を渡るこころは 信士の

虎

あゝぬおろしともひのきく

○

あゝぬおろしともひのきく

○

あゝぬおろしともひのきく

○

あゝぬおろしともひのきく

○

鹿茸のくしけりる木根。

かひきり流り洞のくしけりて 芳

白くした紙をよほくおてて五 種

イニのいの法句

右字仙よふふと

え縁之よりきききききききき

実業の於てのくしけりて 七

根野根

根をくしけりて

根をくしけりて

根をくしけりて

根をくしけりて

根をくしけりて

根をくしけりて

根をくしけりて

御成身は細やまじし

坡

聖徳太子の田行はくらく入

益

此のりよなる殿もまふ

坡

押つたる勝是の口を喰意て

益

尾小尾を神を舞はまじし

坡

男中は地ふせあるはまじ

益

芝子屋の月あちちり

坡

むの所は文の舞をまじし

益

依てまうたまの花し

坡

度尾をまじし御深をいりし

坡

言はまのよしはま

益

裏金を招額のくま

坡

飯の盛せむそもの

益

幸いありは是程の

坡

匠は酒をいそめ

益

とくは振子屋の

坡

袴姿の履をこま

益

月えは後まじの

坡

後心てあかきとてゆらや

五

後より判りてまじり

四

は待て身守り方々の客

三

田と地を<sup>い</sup>を<sup>い</sup>後の橋の

二

三乳<sup>い</sup>あがり方北非<sup>い</sup>は

一

古多山 四方子

水や小糸の<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>二役瀬

湖風

柳<sup>い</sup>と<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>岸<sup>い</sup>の<sup>い</sup>り<sup>い</sup>珠

蓮蓬

足<sup>い</sup>と<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>萌<sup>い</sup>の<sup>い</sup>し

沾蓮

力<sup>い</sup>此<sup>い</sup>柳<sup>い</sup>の<sup>い</sup>り<sup>い</sup>の<sup>い</sup>る<sup>い</sup>物<sup>い</sup>象

利牛

食<sup>い</sup>分<sup>い</sup>の<sup>い</sup>後<sup>い</sup>を<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>朝<sup>い</sup>の<sup>い</sup>目

風

豆<sup>い</sup>を<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>な<sup>い</sup>ま

豆

小<sup>い</sup>溝<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ま

柳

海<sup>い</sup>一<sup>い</sup>と<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ま

牛

長<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ま

尾



花の末まはりの相地 聖旨

又つ花のまはりの相地 意

花のまはりの相地 凡

花のまはりの相地 牛

花のまはりの相地 餅

花のまはりの相地 通

花のまはりの相地 道

花のまはりの相地 高

花のまはりの相地 凡

此道は人形より秋のくれ

道の白のゆかり 凡

月土のまはりの相地 支考

花のまはりの相地 解力

花のまはりの相地 之凡

花のまはりの相地 牛

花のまはりの相地 西

花のまはりの相地 哇止

花のまはりの相地 唯

直以酒女原女梅三月

花柳

兵との若き家ハ種々有

是

かゝる事ヲ更ニ十月

西

とらくと山の新と互折て

扇

此書の理系秋ハ世一

三

律事ハ凡そ事ハ事ハ事ハ

及

境原の船の月と入こじ

我

子あは子る事ハ芝川鳴き

止

此側ハ永代医者の見事ナ

也

白髪好く桂のりやまり〜  
コト

入りまを〜西定世  
之

あま後の綴粉ある枝  
臨

刈梅アさる〜  
益

河原子の竹のり〜  
及

妻のわう移成〜  
取

浦と〜  
道

願わ〜  
及

予ハ御の事〜  
取

くろく海のわろおろし

魚

山らしの地のほろもろ

魚

かきと花より卵籠

魚

目録のあしは

魚

網も録もふと

魚

とみくはしぬ

魚

ふと海のもの

魚

あしは花より

魚

ふと海のもの

魚

秋のむと

魚

月待のむと

車

西の山より

西

いふと

力

あしは

魚

ふと

魚

あしは

魚

あしは

魚

あしは

魚

寄をそらうる年高の杭 毛

此より玉花子けてさきうら 力

さきけりなくハ朧にみえゆる 者

為のまぬねハ家笑う方様 先

雨の月の如く川内 偏

おぼしてまゆとある位り娘 娘

七柱をハまうるも 勝りま 力

又せうのち何紙のあぬをやま 色

小座を子まき秋のころも 然

あし

志願ハハ情をこぼさるる松江

松江

一羽割る千一と群 毛

枯叶ハハあしく松林をばさ ッ

田中ハハたのむる言山く 依之

月初ハハくはあきと解馬 泥若

秋風ハハ上風門ははしり 方持

高のころ海をよと校の言 金糸

雨のころ海をよと校の言 夕雲

猿まうる女おしは性たも 苔葉

似城のさかき守り候なり

格

松林のまをさるる丹波の山

寺

障りわらわらしたるれ

詩六

あまのこころよゆきかたのま

七

さくしめ候し四方のうら

ッ六

吹陸を詠ふ神の月丸るく

那

橋と仰て登るこり川

来

あまのこころ場をさるる

六

編笠を穿入るハヤウウ申

意

神のまををさるる

云

天言のいと地めとらん

那

あまのこころ

如風

路のやまをさるる

馬吉の新木とまをさるる

道

所等の候とある言く

安信

路をなるとある言く

ま

夕の夢初を紀新の風 日記

かこの為らうか 似像 知是

歌仙あり時之とあり

とん書畧

特修や伊原右のさる山原人 知是

初を習しりあーの死 とき

初をぬく力よるる子かして 超人

りり信惚子のぬけるまら 是

時をさるるあるるぬ 道

果をりか人すおほらよれ月 又

新書略

評分

赤尾宗正の祀神と延びて

哀病の種成るるはありて とき

半の月登小海野に観て 知是

里の跡に望まぬ折り家 跡の

寂照堂より詠南一と 超人

道原やさしよ藤も 田んぼ

空せしてるに根とるる北川 知是

雲はより霧成のさる風吹て 芭蕉

春をかりしり踏こけり人

天より人ば花月をたよやハ 足

其るまは月とて海の中なる 為

雲くしに身籠れし人をも 加行

水のまこと物さゆるく 夕嵐

舟あそび櫂もさるる 荷兮

舟の風やまこと申る 雲水

海はうと山はさるる 翁

鐘の秋のこころなり 半

賀新宅

芭蕉

能くも雀のさるる 秋

藤りさるる 知足

秋はもその縁橋なる 安信

風はたさるる 翁

水はあはさるる 足

舟はあはさるる 信

いよよし歌ありしを打あき

松原北川 荷子

あつらひし中宮よむを歌を巻て 重五

松のまじりてふかしのつらも 和木

松の塔 かきん 月をうこ 翁

ひらうよゆめかすらん時年山 楚女

そのまの道かきんかきりあはし  
あふりえんをさきまのまじり  
松のまじり  
海川にまじりてふかしのつらも  
見屋

まのふりり 松のあはれと ともひ

松のまじりてふかしのつらも 一調

松のまじりてふかしのつらも 琴音

牛車ワシてふかしのつらも 空河

前書

松のまじりてふかしのつらも 赤軍

松のまじりてふかしのつらも 守祢

松のまじりてふかしのつらも 芭蕉

松のまじりてふかしのつらも 川玄



寺島亭書

冬

涼しめ海に入りては

月をゆきかたははつと海に 全定

黒野の海に度のもあけて 不玉

静い海に人をも 定連

旅立ちのあはれを物に 石玉

旅立ちのあはれを物に 任曉

旅立ちのあはれを物に 解風

里相より送る

とては海にやまは海に山は 會定

物にたはるとしては三月 益道

旅立ちのあはれを物に 石玉

海にたはるとは海に 石玉

静かなる海に度のもあけて

静かなる海に度のもあけて 益道

静かなる海に度のもあけて 棟重

静かなる海に度のもあけて 東也

静かなる海に度のもあけて 石玉

小畑の抄原書抄士の事

小畑の事 仲のゆかり

三月の事 彦平の事

小畑の事 彦平の事

服部 彦平の事

梶の事 彦平の事

彦平の事 彦平の事

白の事 彦平の事

梶の事 彦平の事

人の事 彦平の事

彦平の事 彦平の事

彦平の事 彦平の事

小畑の事 彦平の事

彦平の事 彦平の事

彦平の事 彦平の事

彦平

彦平

彦平

彦平

かゝるはなはしはうら

筆盤をいそふ深く平好

しつじゆはあ命のけり

外道のまじり玉並ふ良方

胸のうらむ早情は初

之解申由年 早因結

年とやらあやのねに望

多の毒をふきあき

表しあひまのいふあひか

善好

盤子

史邦

吉永

大竹

身句

介我

岩倉

山よりんくるくろく

独りしあはれをいふ

あまのうらむ秋の

あまのうらむ秋の

秋のうらむ秋の

あまのうらむ秋の

あまのうらむ秋の

あまのうらむ秋の

あまのうらむ秋の

あまのうらむ秋の

招風

彫子

櫓儿

善好

仙景

あまのうらむ秋の

あまのうらむ秋の

あまのうらむ秋の

あまのうらむ秋の

あまのうらむ秋の

りしのもうこのち中彼 あり

ははちやうてち中と あり

松の枝をわろし あり

海川より水を登ると見え あり

たのまおにん あり

芭蕉

ちあまのこ あり

あまのこ あり

あまのこ あり

あまのこ あり

あまのこ あり

あまのこ あり

箱知位を重をめて あり

あまのこ あり

あまのこ あり

あまのこ あり

あまのこ あり

あまのこ あり

ついで利くみちいさう

抄録

後之志しむるをすしむるは

了時

又利くむるは後よりみ

抄録

おのれに利く折くは

利而

言はれりやうは

抄録

善くして他をせしむるは

抄録

世にこそは

抄録

夢想之仙俗

梅うさの向うの

抄録

ここの

抄録

雨を

仙俗

あつ

抄録

あつ

抄録

あつ

抄録

あつ

抄録

あつ

抄録

あつ

あつ

抄録

大庭の葉り傳をほく人

芭蕉

松風より吹く雪と交りて

清石

朝霧らうき湯水山を

二并

清和より吹く雪と交りて

具角

昔は僧自をゆきし人

トナ

徳子とていふる娘の名を

筑前

降ニさくのをましとて

白

昔年の七燈はあつたは

道

後々ぬれを竹葉とて

石

葉根を晴しとて文は法縁と

来士は左根よりは解

家

芭蕉

一とてうらみあつたは

玄彦

ふりまらう樹とて

舟竹

かきまらう古日曜の

為

あひまのすけらか

の

彦

ほをえをてあつたは

小

あつたは

知外

日記のつらさ

つらさのつらさ

つらさのつらさ

つらさのつらさ

つらさのつらさ

つらさのつらさ

つらさのつらさ

つらさのつらさ

つらさのつらさ

つらさのつらさ

つらさのつらさ

つらさのつらさ

つらさのつらさ

つらさのつらさ

つらさのつらさ

つらさのつらさ

夕月 唱を續くまた人

命ととも結蓮を續く とを

汝ハテて 柳子又去にの柳

日ありかきる 歌をよめ とを

を食する 柳の柳の中

重して 龍のの 月 とを

目のおぼしめ 是は 詩也

心まわさるるの 龍 とを

ふさふさ 髪をえ とを

花のえのこ ゆる 新 とを

同 葉の 枝 とを

三十 年 とを

あのおの あら とを

柳 枝 とを



あつたあつたあつたあつた  
新六

うねを飾る芳いあつたあつた  
あつた

あつたあつたあつたあつた  
あつた

あつたあつたあつたあつた  
あつた

酒のあつたあつたあつたあつた  
抱月

あつたあつたあつたあつた  
杜酒

あつたあつたあつたあつた  
あつた

あつたあつたあつたあつた  
あつた

あつたあつたあつたあつた  
あつた

あつたあつたあつたあつた  
あつた

あつたあつたあつたあつた  
あつた

あつたあつたあつたあつた  
あつた

あつたあつたあつたあつた  
あつた

梅枝を口舐し極たまらぬ

東の窓の影をきりゆく

庭の中よこぎりの影のまはる

真夏のまはる日影のまはる

花の匂をきりゆく

夜のよそよそしい影のまはる

ほろりたるやゆいなる

花の匂をきりゆく

朝のよそよそしい影のまはる

花の匂をきりゆく

月やこぼれぬ影のまはる

庭の中よこぎりの影のまはる

庭の中よこぎりの影のまはる

我はこぼれぬ影のまはる

庭の中よこぎりの影のまはる

日影長ぬ川の影をみたり 柳青

写海をり古氏をいふ

と也哉

西やしきもあなまをの角

物をたぐ田井のちりたる 司馬

五知なく夜の二段萩のて 別是

ゆき自筆とある

主人

世をたぐつてはもあつた

新とこはさくつ新の指をす 若

月久くとつりの本々再きてワラ

貞享子下卯仲秋未丑日

醫三三國ハワカ母方チヤウツク

妙也チヤウツクをけりてチヤウツク

あれハチヤウツクをけりてチヤウツク

チヤウツクをけりてチヤウツク

柳青のてをききと名をいふ

雲煙のさくはくはくはく 法園

夢のおもひはくはくはくはく 若

此のてをききと名をいふ  
柳青のてをききと名をいふ  
柳青のてをききと名をいふ  
柳青のてをききと名をいふ

龍云軍道はくはくはくはく 若

海客のてをききと名をいふ 若

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

あゝ

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

あゝ

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

あゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

あゝ

名所 麓の山宮の塔 石塔  
月夜に光るの如くを連珠 花雪

うしなはるの山宮の塔 石塔

登りて見ゆ山宮の塔 石塔

山宮の塔宮を望む山宮の塔 石塔

あち略

山宮の塔宮を望む山宮の塔 石塔

なぐれて山宮の塔宮を望む山宮の塔 石塔

杖持方たはしなれ山宮の塔 石塔

此方何處の山宮を望む山宮の塔

山宮の塔宮を望む山宮の塔 石塔

山宮の塔宮を望む山宮の塔 石塔

山宮の塔宮を望む山宮の塔 石塔

山宮の塔宮を望む山宮の塔

石塔

山宮の塔宮を望む山宮の塔 石塔

山宮の塔宮を望む山宮の塔 石塔

山宮の塔宮を望む山宮の塔

山宮の塔宮を望む山宮の塔

山宮の塔宮を望む山宮の塔 石塔

山宮の塔宮を望む山宮の塔 石塔

山宮の塔宮を望む山宮の塔

山宮の塔宮を望む山宮の塔

梅うらやまのすくすく

あはれなまのまのまの

あはれなまのまのまの

あはれなまのまのまの

あはれなまのまのまの

あはれなまのまのまの

あはれなまのまのまの

あはれなまのまのまの

あはれなまのまのまの

あはれなまのまのまの

あはれなまのまのまの

あはれなまのまのまの

あはれなまのまのまの

あはれなまのまのまの

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

世代のまゝあきまきよりあまのこ

卯のまゝと母のまゝをまゝにまゝ

まゝにまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ

松枝よ鳥のまゝより松のまゝ

流るるはけりまゝのまゝ

昨の極むし松のまゝ  
高まゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ

若きし人なりけり物も  
二海

若きし人なりけり物も  
色

雅言

若きし人なりけり物も

若きし人なりけり物も

若きし人なりけり物も

若きし人なりけり物も

若きし人なりけり物も

若きし人なりけり物も

若きし人なりけり物も

若きし人なりけり物も

若きし人なりけり物も

若きし人なりけり物も

若きし人なりけり物も

若きし人なりけり物も

若きし人なりけり物も

若きし人なりけり物も

若きし人なりけり物も



あつちの歌へかゝるあつちの歌へ ころ

あつちの歌へかゝるあつちの歌へ ころ

あつちの歌へかゝるあつちの歌へ ころ

あつちの歌へかゝるあつちの歌へ ころ

あつちの歌へかゝるあつちの歌へ ころ

あつちの歌へかゝるあつちの歌へ ころ

あつちの歌へかゝるあつちの歌へ ころ

あつちの歌へかゝるあつちの歌へ ころ

あつちの歌へかゝるあつちの歌へ ころ

あつちの歌へかゝるあつちの歌へ ころ

あつちの歌へかゝるあつちの歌へ ころ

あつちの歌へかゝるあつちの歌へ ころ

あつちの歌へかゝるあつちの歌へ ころ

あつちの歌へかゝるあつちの歌へ ころ

能くはやくとてはやくとて

そのつれをれしつり

角の底をかくて

少くもさういふくみ

あつちのうらやう

一はくせん

あつちのうらやう

あつちのうらやう

あつちのうらやう

あつちのうらやう

あつちのうらやう

あつちのうらやう

東京府立第一高等学校  
東京府立第一高等学校

東京府立第一高等学校  
東京府立第一高等学校

東京府立第一高等学校  
東京府立第一高等学校

東京府立第一高等学校  
東京府立第一高等学校

東京府立第一高等学校  
東京府立第一高等学校

東京府立第一高等学校  
東京府立第一高等学校

東京府立第一高等学校  
東京府立第一高等学校

画 説

赤い花——ほの酒桶  
赤い花——ほの酒桶

花——ほの酒桶  
花——ほの酒桶

花——ほの酒桶

花——ほの酒桶  
花——ほの酒桶  
花——ほの酒桶

花——ほの酒桶  
花——ほの酒桶

花——ほの酒桶  
花——ほの酒桶

とを

のまのちのちのちのちのち

旅海と都す花の晩 境 分定

とを

櫻のゆきをみよふとを

ふとふとふとふとふとふと 秋風

心地ゆくそ都のふのす

ちのちのちのち

とを

弟のいふこととをのちのち

ふとふとふとふとふと 秋風

とを

物ふまはやくとを

形ありり身はるす年二つ 秋風

身行のちのちのち

加行

まはやくとを

古くゆくゆくゆくゆく 秋風

真実の何れを都の社りして

おまの茶のちのちのち

まはやくとを

まはやくとを

福のいふ人からいふまで

福をいふ年のいふいふ

福のいふいふいふ

福のいふいふいふ

福のいふいふいふ

福のいふいふいふ

福のいふいふいふ

人志のいふいふいふ

福のいふいふいふ

福のいふいふいふ

福のいふいふいふ

福のいふいふいふ

福のいふいふいふ

あつたはりのきりぎりす

あつたはりのきりぎりす

あつたはりのきりぎりす

あつたはりのきりぎりす

あつたはりのきりぎりす

あつたはりのきりぎりす

あつたはりのきりぎりす

あつたはりのきりぎりす

あつたはりのきりぎりす

あつたはりのきりぎりす

あつたはりのきりぎりす

あつたはりのきりぎりす

世をくすくす笑ひては  
影を写すは影の影

あやふくあやふく  
言ふも言ふも言ふも

あやふくあやふく

あやふくあやふく

あやふくあやふく

あやふくあやふく

あやふくあやふく

あやふくあやふく

あやふくあやふく

あやふくあやふく

振のまゝの文のしるしをいふ

石のまゝの文のしるしをいふ

夕顔のまゝの文のしるしをいふ

松のまゝの文のしるしをいふ

金魚のまゝの文のしるしをいふ

花のまゝの文のしるしをいふ

真鍮のまゝの文のしるしをいふ

鹿のまゝの文のしるしをいふ

耳のまゝの文のしるしをいふ

おぼろのまゝの文のしるしをいふ

湯のまゝの文のしるしをいふ

板のまゝの文のしるしをいふ



まじりておぼしきもの

まじりておぼしきもの

まじりておぼしきもの

まじりておぼしきもの

まじりておぼしきもの

まじりておぼしきもの

松林路のまじりておぼしきもの

松林路のまじりておぼしきもの

小僧二人のまじりておぼしきもの

小僧二人のまじりておぼしきもの

松林路のまじりておぼしきもの

松林路のまじりておぼしきもの

為をきつて管は少配り

吾願て麻すよ入舊の儘

と云

佐野のらに振のゆき

又級のさくの紙をすまへり

金と東 佳ホ 大尾

